

平成19年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成19年10月19日
鳥取県病害虫防除所

1 病害虫名 イモグサレセンチュウ (*Ditylenchus destructor* Thorne)

2 発生作物名 ニンニク

3 発生確認の経過

平成19年10月2日、県園芸試験場に腐敗症状が認められるニンニク種球の持ち込みがあった。茎盤部及びりん片内部に多数のセンチュウが確認されたため、青森県農業総合研究センターへ同定を依頼したところ、イモグサレセンチュウであることが判明し、本種による農作物被害の発生が本県において初めて確認された。

4 本種の特徴

(1) 寄主植物

寄主植物は極めて多く、ニンニク、アイリス、ラッキョウ、バレイショでは明らかな被害が確認されている。また、ダイズ、ソラマメなどの豆類においても被害が発生する可能性があるとされている。

(2) 被害の特徴

本種に寄生した種球を植え付けた場合、球茎内部の幼芽や茎盤部の腐敗により未萌芽や萌芽後の枯死を引き起こす。また、健全な種球であっても本種の発生するほ場に植え付けた場合は、本種の寄生によって生育初期に葉のねじれ等の奇形が発生し、枯死する場合もある。

本種の発生するほ場で生産された種球は、一見健全であっても寄生を受けていることが多く、外観で寄生の有無を区別するのは難しい。本種に寄生したりん片を縦割ると、りん片貯蔵葉およびその周辺組織が褐変、あるいはスポンジ状となり、本種が多数寄生しているのが観察される。

また、本種は薬剤に対する耐性が非常に強く、一度ほ場が汚染されるとそのほ場内のセンチュウを完全に駆除することは困難である。

5 防除対策

(1) 寄生が疑われる種球は使用しない。

種子粉衣と土壤消毒の併用により、生育期間中の被害は軽減できるが、球茎へのセンチュウの寄生を完全に防ぐことは困難である。

(2) 寄生が疑われる種球を植え付けてしまった場合、早急に種球を掘り取り、土壤消毒を行うなど被害防止に努め、被害が発生する可能性のある作物は植え付けない。



図1 被害を受けたりん片内部



図2 スポンジ状となった部分の拡大
(矢印は寄生したイモグサレセンチュウ)



図3 被害部から分離したイモグサレセンチュウ